

- 企画名： 「どうやったら市民がエネルギー政策を選べるようにできるか？」
スウェーデンの市民はいろいろ頑張った。さて結果は？」
- 実施日時： 1月15日（日） 15：30～17：00
- 実施場所： パシフィコ横浜会議センター 4F 413
- 登壇者： 講師：ヨーラン・ブリンツェ（Göran Bryntse）、（博士、前スウェーデン反核国民
キャンペーン会長）
モデレーター：佐藤吉宗（スウェーデン・ヨーテボリ大学経済学部研究員）
通訳：レーナ・リンダル（Lena Lindahl）、（持続可能なスウェーデン協会、理事・
日本代表）
- 参加人数： 約100名
- 文責： レーナ・リンダル（Lena Lindahl）、（持続可能なスウェーデン協会、理事・
日本代表）

ブリンツェさんはまず、スウェーデンの残り10基の原発を10年間で廃止できると主張し、その方法を説明した。再生可能エネルギーの新設が原発の新設に比べ安くなるという欧米の傾向もその背景にあると紹介した。その後、自分がキャンペーナーとして関わった1980年のスウェーデンの原発を巡る国民投票の結果と解説と反省点を紹介した。最後に、スウェーデンの核廃棄物最終処分場の問題がまだ解決していないとの見解も説明した。

日本は原発について、大阪市の市民投票の実施のための署名集めが目標に達成し、東京都で市民投票のための署名運動の最中だったので、スウェーデンの国民投票のやり方に対する来場者の関心が高かった。

ブリンツェさんはスウェーデンの国民投票は3択の選挙だったと説明した。政治家は真ん中案を作ったことで結果がぼやけ、国民の大半が段階的廃止を望んだのにまだ実現していないという問題を指摘した。3択を提供する場合のリスク、あまりにも遠い将来まで結果の政策への反映期間を延ばすと反映されないリスクを指摘した。

イベントの目的は「市民の意向をうまくエネルギー政策に反省させるにはどうすればいいか。できればインスピレーションを与えて、可能性を感じさせたい。」ことだった。スウェーデンの問題点を紹介することで、原発住民投票あるいは国民投票を日本で行う場合の具体的なアドバイスを提供でき、来場者にとって参考になった。

14枚のアンケートを回収でき、その内11枚は「非常に参考になった」、1枚は「ある程度参考になった」、2枚はコメントのみの記入だった。9名は「これからも情報ください」と答えた。

アンケートからのコメント：国民投票キャンペーンの様子を表す写真に対して「地下鉄構内に反原発のPRができるのはすごい」。3択で、票が真ん中案に集中し、脱原発に繋がらなかったことに

ついでに印象：「Yes or No と答えられない国民投票がなされたこと、日本はもっとヤバいと思う」。プリンツェさんが話した国民投票原発反対キャンペーンとしての反省点、「国民投票の後に結果の尊重と実施をもっと厳しく政治家にもとめるべきだった」ということも印象に残ったとのコメントもあった。

この講演はプリンツェさんが来日してから最初の講演だったので、日本の事情をまだあまり理解していなかった。日本のいろいろを経験してからの話なら、参加者ともっと噛み合う議論ができたのではないかと思った。

